

徳島大学における「授業設計ワークショップ」の成果と課題

吉田 博、川野卓二、塩川奈々美、上岡麻衣子
(徳島大学 高等教育研究センター)

1. はじめに

2019年、中央教育審議会大学分科会教学マネジメント特別委員会において、FDの高度化が議論されており、その中で、FDの効果測定を行うことの必要性が述べられている¹⁾。FDの効果検証のモデルとしては、カークパトリックの4段階評価モデル²⁾が利用されており、FD受講後に一定期間経ってからフォローアップアンケートを実施し、効果を検証したものや、授業評価アンケートの結果を活用したものが存在する^{3,4)}。

徳島大学では、講師または准教授として新規採用または昇任した教員を対象に、教育力向上を目的とした体系的なFDプログラム「教育力開発コース」を実施している。教育力開発コースのプログラムのうち「授業設計ワークショップ（以下、WS）」は、授業設計に関する基本的な知識やスキルを修得することを目的にしており、2010年度より対象者は参加が義務付けられている⁵⁾。

本研究は、2015年度～2018年度のWSの受講者を対象に受講後1年以上が経過した地点で実施した「フォローアップアンケート」の結果を分析することで、WSの検証を行う。

2. 授業設計ワークショップ

WSは国立教育政策研究所が作成した「新任教員研修プログラム基準枠組み」⁶⁾をもとに、四国地区大学教職員能力開発ネットワーク(SPOD)のコア校が開催する新任教員研修と、到達目標や研修内容を標準化し、研修の互換性を持たせている。2日間でシラバス作成、授業計画、アクティブ・ラーニング、学習評価などの基本的な知識とスキルを修得し、参加者全員が模擬授業及び授業検討会を実施する。2017年度からは、受講者に反転授業を体験してもらうために、事前にビデオ教材を視聴し、シラバス作成等の課題を課した上でWSを行う反転授業形式で実施している⁵⁾。

3. フォローアップアンケート

2015年度～2018年度に実施したWSの受講者88名を対象にフォローアップアンケートを実施した。回答期間を2019年9月17日～30日とし、回答者が特定されない形式のwebアンケートをメールで依頼し、40名から回答を得た(回答率45.5%)。アンケートの設問内容は、①WSの役立ち度(15問;5件法)、②WSで修得した内容の授業実践(14問;4件法)、③教育力向上のための取組の効果(11問;5件法)である。

4. アンケート結果と考察

図1はWSの役立ち度、図2はWSで修得した内容の授業実践に関する設問の回答を示している。

(1) 本調査から分かること

WSの役立ち度について、設問全体の80%以上が、「4. 役立っている」または「3. ある程度役立っている」と回答している。特に、授業設計に関する項目や、近年注目を集めているアクティブ・ラーニングや反転授業の役立ち度は、他の項目と比較して高いことが分かる。また、WS内容の授業実践についても、授業設計に関する基本的な項目は実践している教員が多いが、学生の授業外学習に関する項目や学生の個別ニーズへの対応、ICT技術の活用については、3割程度の教員は実践していないことが分かる。

(2) 過年度のWS受講者との比較

SPODで開催する新任教員研修は、上述したように標準化しており、他大学の研修もWSと同様の研修時間、レベル、内容が担保されている。SPODでは2010年度～2012年度に四国地区で開催された新任教員研修の受講者を対象に、同様のフォローアップアンケートを実施している³⁾。ここでは、その結果と本調査の結果を比較する。WSの役立ち度については、本調査とほぼ同様の傾向がみられ、継続してWSの役立ち度は高いことが分かる。

WS 内容の授業実践については、SPOD の調査と本調査の同じ設問（10 問）のみを抽出して回答を比較した。この結果、「4. 頻繁に行っている」または「3. ある程度行っている」と回答した教員の割合^{注1)}は、すべての項目で増加しており、全体で 18.5 ポイント（60.5%から 79%）上昇した。特に、「授業の予習・復習に必要な時間を示す」については、35 ポイント上昇している。このことから、学生の授業外学習を促進するという観点からの重要性が理解され、近年では実践する教員が増加していることが分かる。

(3) 徳島大学教員（全体）との比較

徳島大学では、全教員を対象に「教員の教育に対する意識調査（以下、TL）」⁷⁾を実施している。そこで、TL と本調査で共通する、日常の授業実践に関する設問（6 問）を抽出して回答を比較した。このうち、4 件法の肯定的な回答の割合について、本調査の方が TL を大きく上回ったものを表 1 に表している。この結果から、WS の参加者は一般の教員に比べて、アクティブ・ラーニング

表 1 肯定的な回答の割合

	本調査	TL
アクティブ・ラーニングを実践する	93%	58%
学習評価手法について工夫、改善する	88%	66%

表 2 設問群間の相関係数

	①	②	③
①WS の役立ち度	—		
②WS で修得した内容の授業実践	0.38*	—	
③教育力向上のための取組の効果	0.48**	0.28	—

***は p<.01、**は p<.05 を表している。

や学習評価など、徳島大学が重視している項目について、授業で実践していることが分かる^{注2)}。

(4) 設問群間の相関

①WS の役立ち度、②WS 内容の授業実践、③教育力向上のための取組をそれぞれ設問群とし、各設問群の主成分分析を行った。その結果、第一成分における各項目の負荷は、③の 2 つの項目を除いて 0.3 以上であった。この 2 項目を除くことで、各設問群の信頼係数 α は、0.82 以上となり、各設問の回答を 4~0 で数値化して設問群の合計点を算出した。設問群の合計点に関する相関係数を表 2 に示している。この結果から、WS の役立ち度が高い教員は、WS で修得した多くのことを日常の授業の中で実践しており、教育力向上のための取組にも効果を感じていることが分かる。

注 1 SPOD 調査では「研修前からすでに行っていた」という選択肢があったが、この回答も「行っている」とみなし、含めて数値を算出した。
 注 2 徳島大学では、2018 年に成績評価基準や教育の内部質保証に関する方針を定め、成績評価の適切な運用に努めている。アクティブ・ラーニングについては、数値目標を設定して導入を推進している。

参考文献

- 1) 中央教育審議会（2019）「教学マネジメント特別委員会（第 8 回）会議資料」.
- 2) 鈴木克明（2015）「研修設計マニュアル」、p. 11、北大路書房.
- 3) 吉田博、宮田政徳、上岡麻衣子、山田剛史（2015）「SPOD において標準化された新任教員研修の成果と課題」、第 21 回大学教育研究フォーラム 発表論文集、106-107.
- 4) 沖裕貴、高比良美詠子、杉井俊夫、西川鈺治（2019）「授業評価アンケート結果から見る FD 研修の効果」、大学教育学会誌、第 40 巻、第 2 号、36-45
- 5) 川野卓二、吉田博、上田勇仁（2019）「2018 年度徳島大学全学 FD 推進プログラムの実施報告」、大学教育研究ジャーナル、16、27-45.
- 6) 国立教育政策研究所（2009）「FD 実質化のための提案」、55-57.
- 7) 徳島大学（2017）「第 3 回教員の教育に対する意識調査」（学内限定資料）.

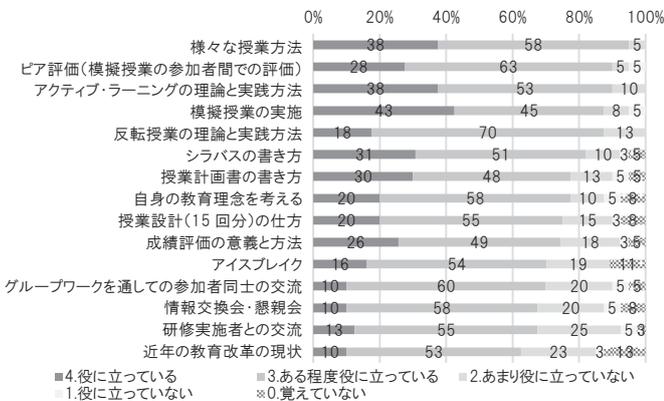


図 1 WS の役立ち度

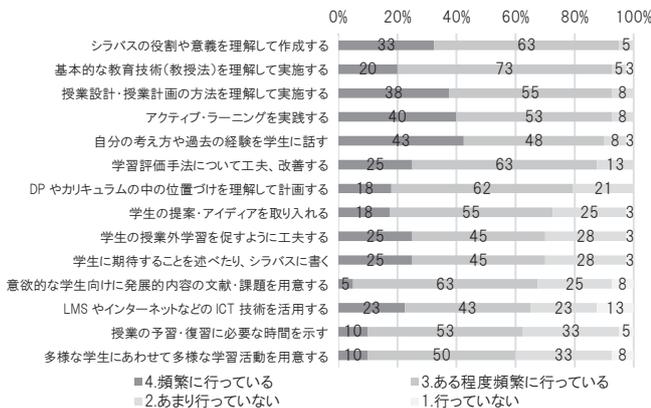


図 2 WS で修得した内容の授業実践